

## タスク主導の言語教育アプローチ (Task-Based Language Teaching, TBLT)

### —その理論と実践—

本ワークショップの前半部分では、まず TBLT といわれるタスク主導の言語教育アプローチの理解を深めることを目的とします。TBLT は英国で生まれたコミュニカティブ・アプローチ (Communicative Language Teaching, CLT) の発展形であると考えられています。この点を理解するために、TBLT 以前の英国における言語教育の歴史的な変遷について簡単に説明します。この中で、TBLT との対照として引用されることが多い PPP (Presentation-Practice-Production) という 1 つの言語教育アプローチについても触れることになります。次にタスクの定義を整理した後、「タスクが学習を主導する、または促進する」ということについて考察を加えたいと思います。この中で TBLT という言語教育アプローチが目指す言語教育の目的について明らかにする予定です。後半部分に行われる予定のワークショップにつながるために、Willis (1996)、Willis and Willis (2007)、そして Samuda et al (2000) の知見をもとに、テーマ・トピックをどのようにタスク化していくかについての一つの提案を行います。そして後半部分において、それぞれの実践において TBLT の原理をどのように応用することができるかについて考察し、実際にタスクを作成するワークショップを行う予定です。

The first half of this workshop aims to promote a deep understanding of a language teaching approach called Task-Based Language Teaching (TBLT). TBLT is considered a developmental form of Communicative Language Teaching (CLT) and to understand its historical background, we would have to trace back to the history of second language education and to touch upon a language teaching approach called PPP (Presentation-Practice-Production). After defining what constitutes a 'task' in TBLT, I will consider how tasks can promote language learning. I will also demonstrate how to create a task (or a task chain) based on a topic/theme considering some implications presented in Willis (1996), Samuda et al (2000) and Willis and Willis (2007). In the second half of this workshop, I will organise the workshop to devise a task to be used in one's own teaching environment by applying some TBLT principles.

略歴：ロンドン大学教育学研究所 (Institute of Education, University of London) 修士課程修了後の 2000 年に日本語講師 (Language Instructor) としてカーディフ大学 (日本研究センター) に着任。現在、現代語学部日本学科・准教授 (Senior Lecturer)、兼日本学科長 (The Director of Japanese Studies Programme)。専門は、日本語教育学、特にタスク中心の言語教育実践とその実践研究。主な著書・論文は、『第二言語習得研究と言語教育』(畑佐一味、畑佐由紀子、百濟正和、清水崇文編 2012) と「TBLT の日本語教育への応用と実践：タスク統合型の言語教育デザインに向けて」『第二言語としての日本語の習得研究』(16), 74-90, 2013 などがある。